

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2017年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

2017.12

第63号

真実の前に立つ

親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉

昨年、オックスフォード英語辞典によって「2016年を代表する言葉」として選別されたこともあり、「ポスト・トゥルース (post truth)」という言葉が耳にする機会が増えた。「客観的事実よりも感情や個人的信念に訴えるものが影響力をもつ状況」を言い表したこの言葉は、たとえ事実（エビデンス）を伴わなくとも、人々の感情に訴えるメッセージや政策こそが現実にもつという現在の潮流をよく示したものである。実際、政治の場面だけでなく、メディアやインターネットなどにおいて、いともたやすく「事実」が捻じ曲げられている場面を私たちは頻繁に目にする。「フェイクニュース」という言葉も、同様に流行語のようだ。

これらの言葉が、現在の世界の在り方に対する批判的機能をもつことは間違いないだろう。事実を無視して政策決定が行われるなど、恐ろしい限りである。しかしながら、「ポスト・トゥルース」という言葉を最初に聞いたとき、私は何となく違和感をおぼえた。「真実の後」？「真実」がどうでもよかった時代の到来？このような言い回しは、まるで「真実」の時代、「真実」が何よりも重視されていた時代があったかのような印象を与える。しかし、それは一体いつのことなのか？

そしてこの違和感は、「ポスト・トゥルース」という言葉が、多くの場合、自分とは対立する陣

営を批判するときに使われることによって強められる。対立者が「真実」を歪めているという告発は、時に自分こそが「真実」の保有者であるという驕りに繋がりがかねないからだ。

ここで清沢満之の歩みを思い起こすのは無駄ではないだろう。晩年の清沢は、「真理の標準や善悪の標準が人智で定まる筈がない」（『我は此の如く如来を信ず（我信念）』『清沢満之集』岩波文庫）との考えに行き着き、如来への信仰に安心を見いだした。しかし、彼がそうした「自力の無功」の境地へと至ったのは、「智慧や思案の有り丈を尽して其頭の挙げようのない様になる」（同上）という苦闘を通してであった。ここには、どこまでも「真実」を探索しようとする欲望と、にもかかわらず「真実」を見出すことのできない自己に対する徹底した洞察がある。

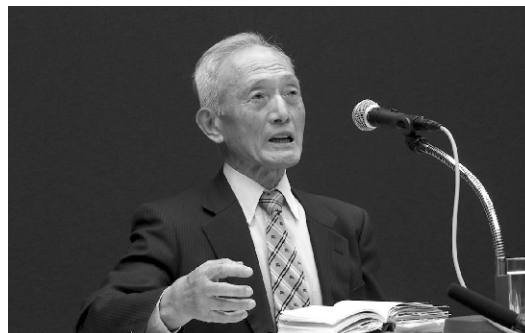
もしも「ポスト・トゥルース」という言葉が、「真実」の所有権をめぐる空虚な争いを生み出し、かえって社会に分断を起こすようなことがあるならば、私たちはあらためて立ち止まる必要があるのかもしれない。本当に「真実」を所有しうるのは誰なのか、私たちは「真実」の所有者たりうるのか、と。私たちは「真実」の「後」にいるのではなく、あくまでもその「前」に立ち続けるのではないだろうか。

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④

本願の大きな世界

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第103回～105回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、103回では「菩薩」、「自在」等について、104回では「大慈悲」、「五眼」について、105回では「空にして所有なし」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第102回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■あらゆる世界に行く

「かの国の菩薩は、仏の威神^{いじん う}を承けて、一食^{いちじき}の頃^{あいだ}に十方無量の世界に往詣^{おうぎ}して、諸仏世尊^{くきょう}を恭敬^{くきやう}し供養^{くやう}せん」（『真宗聖典』52頁、東本願寺出版）。浄土の菩薩は阿弥陀の力を受けることによって、「一食の頃」に、つまり一回食事をする間に、あらゆる世界に行くことができると。このようなことは、有限な身ではできないわけです。

宮沢賢治の詩（「雨ニモマケズ」）で、“東・西・南・北に行って、病気の人があったら看病したい、疲れた人があったら手助けしたい、死にそんな人があったら怖がらなくていいと言いたい”と、そのように言うでしょう。あれは菩薩の願心と言っても良いと思うのです。けれども、身は一つしかない。そうするとあっちもやりたい、こっちもやりたい、全部やりたいといっても現実にはできない。身が分裂するしかない。でも、願いはある。これは菩薩の願心、大悲心と言うしかない。だから、浄土の教えでは法蔵菩薩の願心でわれわれに

呼びかけてくる。では、われわれにできるかといったら、できないわけです。そういうところに悲しさがあるわけです。悲しい、でも世界が開ける。大きな慈悲が呼びかけている世界があるのだと。壁のない仏の大きな世界がある。

「かの国の菩薩は、仏の威神^{いじん}を承けて」、つまり本願力をいただいて、本願力に託すことにおいて、あらゆる世界にはたらくことができると。これを親鸞聖人は「還相回向^{げんそう}」というかたちで教えてくださっているのだと思うのです。われわれが個人でできるはずがない。でも、本願力のはたらきのなかに凡夫が生かされることにおいて、本願力を観じ、本願力を語っていくことはできる。でも、自分が本願力を行ずるなどということはできない。だから、菩薩ですら仏の威神力を受けてできると、こういうことが言われてくるわけです。

■本当に満ち足りたもの

そして、そこに「心の所念^{しん}に随^{したが}いて」「無数無量の供養^{むしゆ}の具^{しねん}、自然^{けしやう}に化生^{はな}して念に应じてすなわち至らん」（同上）と。華^{はな}やら、香りやら、音楽やら、仏に捧げるような供養の品々が自然に化生する。「化生」というのは、本願力のはたらきにおいてひとりで生まれてくることです。

先ほどの例で言うなら、東・西・南・北に違った苦悩の人たちがいる。どっちにも行きたいと言うけれど行けない。そのような状況を生きている命に対して、どうすれば良いのか。どうしようもないのです。大きな慈悲がみんなそれぞれに満ち足りた世界を与えているのだから、お前はまず、

お前自身に本当に満ち足りたものを見つけよと。だから、一食の頃に十方無量の世界に行けるといふのは、そういう満ち足りたものを本当に見いだしたならば、全部が満ち足りている世界に気づく。気づいたことにおいて、全部が満ち足りていると、こういうことが見えてくる。

でも、現実にはどこも満ち足りていないではないかと。現実には生老病死ですから、生まれてくる時も大変だし、生きていることも大変だし、さらに亡くなっていく人をたすけるとなれば、それも大変だし、有限な力ではもうどうにもならない。できるところでやるしかない。できるところでやって空しく過ぎると感じたらどうするのだと、そういう問題です。それに対して大悲の本願は、あなたが要求しているものは既に満ち足りているよと。

■「汝、何の不足がある」

それで、清沢満之があのようなすごい文章を書いたことが感動を与えるのです。あれは、如来の心を自分に呼びかけている語り方だと思うのです。それは「請う勿れ、求むる勿れ、汝、何の不足かある。若し不足ありと思わば、是れ汝の不信にあらずや」（『臘扇記』）と書いておられる文章です。求めたり、どうかくださいと言ったり、そのように求めて如来からくるものではないのだと。お前に何の不足があるのか。このように確認しておられる。何かズキンとくるわけです。何でもズキンとくるのかとずっと思っていたのですけれど、こんなことを言われても無理だ、やっぱり不平不満しかないといわれわれは思いながらも、「汝、何の不足かある」というその迫力にすごいと思うのです。あれは結局、本願がわれわれに呼びかけている呼びかけ方だと思うのです。

それがここでは、菩薩の仕事として、あらゆる諸仏の世界に行って、諸仏を供養して、もうあつという間に全部できますよと。このように本願の大きな世界とわれわれ凡夫の小さな世界とは、別々なようだけれども、実は、個としてそれぞれ

あること全部を包んで無限であると同時に、一人ひとりに無限が来ている、そういう関係にあると表わしているのだと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2017年8月～2017年10月）一抄出—

■2017年

8/1 人事発令（越部良一、法隆誠幸、飯島孝良が嘱託研究員として再任）

8/4 ご命日のつどい

8/8 第104回（通算第155回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

8/10 第203回英訳『教行信証』研究会

8/21 第16回「『教行信証』と善導」研究会

8/22 第3回「三宝としてのサンガ論」研究会

8/28 第179回清沢満之研究会

9/6 第4回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会

9/8 ご命日のつどい

第57回現代と親鸞の研究会「遠藤周作と井上洋治の思索—現代日本人に南無の心に生きる喜びと平安を届けるために—」ノートルダム清心女子大学副学長・キリスト教文化研究所教授：山根道公氏（文京区・親鸞仏教センター）

9/13 第204回英訳『教行信証』研究会

9/15 第180回清沢満之研究会

9/17 第24回真宗大谷派教学大会（しんらん交流館）：青柳研究員発表「伝承と己証—『教行信証』の構造に関する研究史と曾我量深の思索—」、中村嘱託研究員発表「證空の見仏／往生論」

9/19 第4回「三宝としてのサンガ論」研究会

9/29 第17回「『教行信証』と善導」研究会

10/3 第105回（通算第156回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

10/13 ご命日のつどい

10/17 第5回「三宝としてのサンガ論」研究会

10/24 第18回「『教行信証』と善導」研究会

10/27 第205回英訳『教行信証』研究会

10/30 第181回清沢満之研究会

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第56回

よく生きるということ

哲学者 岸見 一郎 氏



岸見 一郎（きしみ いちろう）氏

哲学者

2017年6月6日、哲学者の岸見一郎氏をお迎えし、「よく生きるということ」というテーマで「現代と親鸞の研究会」を開催した。氏は、専門のギリシア哲学と並行してアドラー心理学を研究され、人間の本当の幸福とは何かということを深く探求されている。

今回は、プラトン、アルフレッド・アドラー、三木清などの言葉を通して、「幸福」と「成功」との違い、「対人関係のなかでの幸福」ということなどを丁寧にお話しいただいた。ここにその一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 大谷 一郎）

■私に影響を与えた人々

私の研究のベースはギリシア哲学です。哲学というのは言葉も概念もギリシアから始まったもので、まずギリシア、特にプラトン哲学を学び、そこから出られないで今に至っています。

その後、1989年にオーストリアの精神科医、心理学者であるアルフレッド・アドラーの思想に触れました。私自身の子育てに関わるなかで出会い、私のなかで無視できない存在として位置づけられる思想家になりました。もう一人が三木清です。三木に触れたのは高校時代です。高校の倫理社会の先生が京都帝国大学で哲学を学ばれた方でした。西田幾多郎の弟子にあたる人であり、三木とも年の近い方だったのですが、一切、京都学派の思想には触れず、西洋哲学の思想をたたき込んでくださいました。なぜあえて触れられなかったのかいろいろあるとは思いますが、そのころから三木清はずっと気にかかる存在で折りに触れて読み続けてきました。

1956年、京都府生まれ。哲学者。京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学（西洋哲学史専攻）。京都聖カタリナ高校看護専攻科（心理学）非常勤講師。

著書に、『アドラー 人生を生き抜く心理学』（NHKブック、2010年）、『生きづらさからの脱却 アドラーに学ぶ』（筑摩書房、2015年）、『幸福の哲学 アドラー×古代ギリシアの智恵』（講談社、2017年）、『三木清『人生論ノート』を読む』（白澤社、2016年）など多数。

共著に、『嫌われる勇気——自己啓発の源流「アドラー」の教え』（ダイヤモンド社、2013年）、『幸せになる勇気——自己啓発の源流「アドラー」の教えⅡ』（ダイヤモンド社、2016年）など多数。

訳著に、アドラー『人生の意味の心理学（上・下）』（アルテ、2010年）、プラトン『ティマイオス／クリティアス』（白澤社、2015年）など多数。

また、親鸞仏教センター情報誌『アンジャリ』第33号（2017年6月1日発行）に「偽りの結びつきから真の結びつきへ」をご執筆いただいている。

■個人の幸福の優先

亡くなられた哲学者の池田晶子さんが、幸福について多くの哲学者が書こうとしてきたが、すべて頓挫した、ということを言っています。私は、幸福について考えないで生きることはそもそもできないのではないかと、学生時代から考えています。

問題提起という形で言わせていただきたいのですが、個人の幸福の欲求が抹殺されてはいけないと三木清は言っています。抹殺されてはいけないということを言わなければいけないということは、逆に言うと抹殺されそうな時代に生きていた

ということです。同じことが今の時代にも当てはまるということを、今回、『人生論ノート』を読み返してあらためて思いました。人は社会から離れて生きることはできないので、いつの時代も自分だけが幸福になることはできません。しかしながら、個人は社会に対して独立であるということを認めなければならないと思います。今の時代は、みんなのためということを言います。みんなが個人に優先するというような考え方をもつ人が多い。ですから、「私は私の人生を生きる」というようなことを言うと利己主義でエゴイズムだとたたかれます。しかし、私は何よりも個人の幸福を優先しないといけないと思います。

■成功と幸福

三木清はこう言います。「成功するということが人々の主な問題となるようになったとき、幸福というものはもはや人々の深い関心でなくなった」（『人生論ノート』、新潮社）と。また、「成功と幸福とを、不成功と不幸とを同一視するようになって以来、人間は真の幸福が何であるかを理解し得なくなった」（同上）と戦前に書いています。そしてさらに、成功は一般的なもの、量的なものであり、他方、幸福は各人のもの、質的なものであるといえます。私は、これはとても深い洞察だと思っています。

また、三木はもう一つ論点を挙げています。幸福は存在に関わり、成功は過程に関わるということです。良い学校や良い会社に入るために努力し勉強する。そういう過程を経て初めて手に入れるものは、実は幸福ではなくて成功なのだと思います。それに対して幸福は過程ではないのです。何かを達成しなくても、今こうして生きていることがそのまま幸福だということです。つまり、成功は直線的な向上であるのに対して、幸福には本来進捗（ちんしゆく）というものはないのであるということです。目的論の立場に立てば、ある経験をしたから不幸になるわけでもなく、幸福になるわけでもありません。何かを経験することや、将来何かを達成することとはまったく関係なく、今、人はこのままで幸福であるのです。

■対人関係のなかの幸福

結論的な話でいうと、対人関係のなかでしか人は幸福になれないのです。アドラーは、あらゆる悩みは対人関係の悩みであるという言い方をしています。対人関係のなかで傷つくことを恐れる人はいます。ところが、対人関係は幸福の源泉でもあるのです。人は人との関係のなかであって、初めて生きる喜び、幸福であるという感覚をもてるということも、本当だと私は思うのです。

対人関係に入っていくには、自分に価値があると思えなければなりません。アドラーは自分に価値があると思えるときに勇気をもてると言っています。この勇気は対人関係のなかに入っていく勇気です。自分に価値があると思えるためには貢献感が必要です。まず自分の問題として何ができるかを考え、できることをやっていくのです。

今の時代は、生きる人の価値を生産性にしか求めないということが大きな問題だと思います。何ができるかということにしか価値をおかない。ですから、高齢の方、病気の方は生きている必要がないというような考え方をしている人の割合が大きいように思います。相模原で非常に不幸な事件がありましたが、また同様の事件が起こらないか危惧（きぐん）しています。そういう世間の価値観を完璧に転倒（てんたう）する、ひっくり返さなければいけないと思うのです。（文責：親鸞仏教センター）



研究会の様子

※岸見氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第38号（2018年12月1日号）に掲載予定です。



リフォーマーとしての 清沢満之

——「教団」の世紀と精神主義——

親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉 氏

2017年6月20日、天理大学人間学部教授である岡田正彦氏をお招きし、「リフォーマーとしての清沢満之——「教団」の世紀と精神主義——」というテーマで、「清沢満之の研究会」を開催した。岡田氏は、これまで宗教学的な観点から近代仏教研究に取り組んでこられたが、清沢満之についても同朋会運動との関わりの中で、その信仰上の意義を鋭く問い直している。本研究会では、宗教教団の近代化という大きな視野に立って、清沢満之と同朋会運動についてお話いただき、さらにそこから21世紀の信仰、教団のあり方についての問題提起をいただいた。ここにその研究会の一部を報告する。

1. 新宗教／伝統宗教

私が研究を始めた30年前は、新宗教の研究が盛んでした。私自身そうした研究から多くを学びましたが、しかし、伝統宗教／新宗教という単純な区分には疑問も感じていました。伝統宗教のなかにも、信仰という点で人生に新しい価値を与えるような動きがあるのではないかと。また同時に、新宗教も時を経ることで形骸化し、「家の宗教」になっていくという側面もあるのではないかと。つまり、宗教は常に形骸化していく傾向をもつのであり、だからこそそれを揺り戻し、覚醒させる必要があるのではないかと考えていました。そして、そういった信仰覚醒運動を起こした人物として、近代の歴史のなかでも特筆すべきなのが清沢満之です。清沢満之を理解するにはこの点が重要であり、単に哲学者・思想家として語るだけでは不十分であると思います。



岡田 正彦（おかだ まさひこ）氏

天理大学人間学部教授

1962年、北海道生まれ。天理大学文学部宗教学科卒業。大正大学大学院博士課程中退（宗教学）。アリゾナ州立大学大学院修士課程修了（宗教学）。スタンフォード大学大学院博士課程修了。天理大学専任講師、助教授・准教授を経て、現在、天理大学人間学部宗教学科教授。専攻は宗教学（近代宗教思想）。

著書に、『忘れられた仏教天文学——十九世紀の日本における仏教世界像——』（ブイツーソリューション、2010年）、『宗教の詩学——テキストとしての「宗教」を読む——』（天理大学附属おやさと研究所、2007年）など多数。

共著に、『近代仏教スタディーズ 仏教からみたもうひとつの近代』（法蔵館、2016年）、『宗教社会学を学ぶ人のために』（世界思想社、2016年）、『近代化と伝統の間——明治期の人間観と世界観』（教育評論社、2016年）、『国家と宗教——宗教から見る近現代日本——（上巻）』（法蔵館、2008年）など多数。

2. リフォーマーとしての清沢満之

近代以降の歴史のなかで、伝統的仏教教団の側でも信仰覚醒運動が起こります。各宗派がさまざまな取り組みを行いましたが、精神主義は大変顕著なものでした。清沢満之という個人の信仰の目覚めが弟子たちを感化し、やがてその精神を引き継いだ同朋会運動が生まれます。教団そのものの改革に大きな影響を与えた清沢を、私は宗教学の用語を借りて「リフォーマー（改革者）」と呼びました。ただし、清沢の運動は非常にラディカルなものであり、あるいは「ファウンダー（創設者）」と言ってもいいかもしれません。清沢が起こしたのは教団内の改革なのか。それとも新しい運動なのか。ここには考えるべき問題があります。また、清沢が行ったことは仏教の近代化であると言われるかもしれませんが、しかし「近代」のモデルがすでに古くなってきているという問題もあります。

3. 「個」の信仰と「教団」の再編

私は10年ほど前に西方寺を訪れ、清沢が晩年を過ごした部屋を見せていただきました。家族を次々と失い、病も進行していた彼は、その狭い部屋で「我信念」を書いたわけです。不幸のどん底にありながら自らの境遇を肯定するということのすごさ。清沢がリフォーマーとなりえたのは、まさにこの信仰的実感のすごさがあったのだと思います。

このような清沢の新たな信仰の目覚めが、以後の教団改革運動の核心となっていきます。真宗大谷派の同朋会運動は「家の宗教」を乗り越え、「個」の信仰的目覚めを促すものでした。信仰の目覚めを求めるという動きは、新宗教だけでなく、伝統教団内にも起こります。時代に応じて信仰を覚醒させるという運動は、通宗教的に確認されるものです。真宗大谷派の場合は、まさしく同朋会運動というかたちでそれを行いました。清沢満之という一人の信仰者の意識改革をモデルに個々人の信仰覚醒が促され、それにより、信仰をもった個人の集まりとして、新たな「教団」が再編されていったわけです。

4. 信仰の近代化は21世紀の信仰モデルになりうるか？

しかし、このような動きは、近代日本という限定された状況において大きな可能性をもつものであったことを忘れてはなりません。清沢が違う時代に現れたなら、宗務機構の改革に先立つ意識改革というものを、はたしてなしえたのでしょうか。このことを問う必要があります。

同朋会運動と同時期に、大谷派以外の各宗派でもさまざまな改革運動が起こりましたが、その多くは失敗に終わっています。日本は依然として地域の絆を重視する村社会であり、日本人にとっては「家の宗教」が強かった。結局のところ、それが改革運動失敗の原因です。しかしどうでしょう。その地域社会は現在すさまじい早さで解体されつつあります。同朋会運動の障害となっていた「家

の宗教」も同様に弱まっている。そうであるなら、改革運動を疎外するものは何ともなくなり、同朋会運動は今後上手くいくということになるのでしょうか。個々人の信仰は覚醒されていくのでしょうか。

ところがそう単純ではないようです。最近の20代の人に話を聞くと、霊の存在を信じているという人が少なくありません。しかし、だからといって祖先を敬っているわけではない。一見すると若い人のなかで宗教的関心が高まっているが、それは以前とはまったく違うものなのです。教団の志向する宗教の近代化と、現代人が求める宗教性にズレがある。もはや「個」の信仰が新しいものではなくなくなっているという状況があります。

20世紀は宗教が「教団」になった時代と考えることができます。「宗祖」がいて、「個々の信者」が主体的なコミットメントをもち、「教団」を形成する。こうしたかたちで伝統宗教は再編されてきました。ある意味では、同朋会運動はその最先端にあったということができます。しかし、今後はどうなるのでしょうか。「家の宗教」が解体されつつある今、「個」の信仰はこれからどのようなものになっていくのでしょうか。

(文責：親鸞仏教センター)

※岡田氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第39号(2019年6月1日号)に掲載予定です。



研究会の様子

「行巻」大行釈における 善導引文の展開について

親鸞仏教センター研究員 青柳 英司 氏

親鸞は「行巻」の大行釈に、善導著作から合計十文を引用し、これを結ぶ箇所には『観経疏』の六字釈（言南無釈）を解説する自釈（南無之言釈）を配置している。ただ従来の『教行信証』の読解は随文解釈的であり、1つの引文に1つの主題を見る傾向が強い。そのため引文相互の関連や展開については、十分な注意が払われてこなかった。そこで本研究会では、近年の研究成果を踏まえながら、大行釈の善導引文の構造について、試論を提示した。

※引用文の出典は、『昭和新脩法然上人全集』＝『昭法全』、『定本親鸞聖人全集』＝『定親全』と略記した。

1、問題設定の妥当性

親鸞は「行巻」の大行釈において、七祖の引文を年代順に配置している。しかし、善導著作の配列は、著作の成立順であるとは考えられない。

もちろん善導著作の成立年代は、書誌学的には確定していない。しかし、親鸞の師・源空は『善導十徳』において、

礼讃、観念法門等、源は此の疏（『観経疏』）の意より出でたり。もし此の疏の霊夢証定なかりせば、礼讃、観念法門、何ぞ必ずしも之を用いんや。（括弧内筆者『昭法全』830頁）

と述べており、善導思想の根源に「霊夢証定」を見ている。親鸞が引用の基準を、時間軸や善導の思想展開に置いていたのであれば、「行巻」でも『観経疏』から引用が始められていただろう。しかし、実際は、そうっていない。ここには別の基準、別の理由があったと考えるべきである。

2、引文の展開を見る視座

近年の『教行信証』研究において、引文の展開を読み解くうえで注目されているのが、「已上」や「乃至」等の引文指示語である。特に「已上」や「已上抄要」等の記号は、文意の区切れを示し

ていると指摘されている。そして、このような視座を基準にすると、大行釈の善導引文は、以下の5つに区分することができる。

A

・『往生礼讃』「前序」一行三昧の文 → 已上

B

・『往生礼讃』「日没讃」阿弥陀仏の名義の文 → 已上

C

・『往生礼讃』「初夜讃」第一偈、第十七偈、第十八偈の文
・『往生礼讃』「後序」善知識の文 → 已上

D

・『往生礼讃』「後序」現世利益の文
・『観経疏』「玄義分」序題門の文
・『観経疏』「玄義分」和会門の文
・『観念法門』「五縁功德分」撰生増上縁の文
・『観念法門』「五縁功德分」証生増上縁の文 → 已上

E

・『般舟讃』の文 → 已上抄要

このように、引文指示語を基準にすると、著作の違いや引用箇所の違いは、必ずしも文意の切れ目を意味するものであるとは言えないだろう。本稿では特にDからEへの展開について注目してみたい。

3、増上縁と六字釈

Dに挙げた5つの文を1つの引文群として見た場合、「増上の誓願」や「増上縁」という言葉が繰り返し使われていることに気づく。

まず、『往生礼讃』「後序」の文だが、ここでは現生に実現する称名の利益について、問答がなされている。ここで善導は「滅罪」や「護念」の利益を挙げた後に、いわゆる本願加減の文を置き、

彼の仏、今現に在して成仏したまえり。当に知るべし。本誓重願、虚しからず。衆生称念すれば、必ず往生を得と。

（『定親全』1・45頁）

と述べる。そして『阿弥陀経』の六方段を挙げ、この教説が一切諸仏の証誠護念するところであることを示して、

今既に此の増上の誓願います、憑^{たの}むべし。諸の仏子等、何ぞ意を励まして去かざらんや、と。
（『定親全』 1・47頁）

と結ぶのである。これは「行巻」の展開としては、善導が釈迦・諸仏の称名を受けて、自らもまた名号を称讃し、往生を勧励する者となったことを示すものだろう。

次に親鸞は、『観経疏』から2文を引用する。1つは、「阿弥陀仏の大願業力」が「増上縁」となることによって、「一切善悪の凡夫」に往生が実現することを明示するものであり、もう1つは善導の六字釈である。

この六字釈に対して親鸞が、

南無の言は帰命なり。（中略）帰命は、本願招喚^{しょうかん}の勅命なり。

（中略筆者『定親全』 1・48頁）

という独自の理解を示していることは、よく知られている。しかし、『観経疏』引文までの展開だけで、この結論は導けないだろう。むしろ、名号の意味を決定的に転換させているのは、『観念法門』以降の展開であると考えられる。

親鸞は『観念法門』から、摂生増上縁と証生増上縁の文を、1文ずつ引いている。ただ後者は、経文の部分を用いていない。これは、摂生増上縁に引かれた本願文が、そのまま証生増上縁の意味を併せもつということであろう。

なお、証生は『観念法門』の文脈では、「得生を保証する」という意味である。しかし、「行巻」の文脈では、「善悪の凡夫」に「^{よく}尽く往生を得しめんと欲す」如来の意欲として読むことができる。

また増上縁について親鸞は、

弥陀の本弘誓願を

増上縁となづけたり

（『定親全』 2・和讃篇・112頁）

と述べているため、本願力そのものとしてとらえていたと考えられる。

そして、この証生という本願のはたらきの具体性を示しているのが、Eの『般舟讃』引文であろう。ここでは、衆生に「弥陀の号」「弥陀弘誓の門」を選び取らせるために、釈尊はあえて八万四千の法門を説いたのだとされる。つまり、あらゆる仏説とは本質的に、衆生に名号を与え、「往生を得

しめん」とする、如来の意欲から生まれたものである。

親鸞が「帰命は本願招喚の勅命なり」と述べるのは、以上の文脈を踏まえた直後である。そうである以上、諸仏の発遣を生み出す証生のはたらきと別に、「本願招喚の勅命」があると考えられるべきではないだろう。われわれが名号を聞き得るのは、諸仏の教言を通してのみである。そのため親鸞は、諸仏の教言を生み出す名号の根元的な意味を、「本願招喚の勅命」という言葉で言い当てたのではないだろうか。

■『アンジャリ』第34号刊行 (2017年12月1日)

- 田島正樹「呻きつつ求める者」
- 青山拓央「無益だが手放しがたい^{いか}怒りについて」
- 井上智洋「人工知能がもたらす労働のない社会」
- 山内志朗「雪と重力」
- 福嶋 聡「書店は、劇場である」
- 木村草太「法教育の重要性」
- さとうまきこ「三十五年前の個人面談」
- 岸上 仁「いのちの根源的連帯を求めて」
- 吉永進一「大拙研究の新展開——日本文研国際シンポジウム「鈴木大拙を顧みる：没後五十年を記念して」」に出席して」
- 本多弘之「宗教心と根本言(2)」
- 飯島孝良「或る夏の「帰郷」」



■『現代と親鸞』第36号刊行 (2017年12月1日)

- 研究論文「仏教世界における歴史家の視点—僧祐・道宣を中心とする史書編纂の背景—」戸次顕彰
- 現代と親鸞の研究会「宗教性を哲学者はどう考えるか」森岡正博／「〈生まれる〉ことをめぐる倫理学のために—〈誰〉かであることの〈起源〉—」加藤秀一
- 第15回研究交流サロン「現代と古典—「役立つ」学びとは?—」発題：川井博義、コメンテーター：田中さをり
- 連続講座「親鸞思想の解明」「浄土を求めさせたものの—『大無量寿経』を読む—(22)」本多弘之

鈴木大拙没後50年記念特集

- 英訳『教行信証』研究会「Suzuki Daisetsu's Presentation of Buddhism to the West」マイケル・バイ
- 研究論文「動きだす大悲—「The Original Prayer」についての一考察」田村晃徳



「三宝としてのサンガ論」 研究会開催にあたって

親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰

僧伽（以下、サンガ）は三宝の一つであり、仏や法と同様に仏教徒の帰依の対象である。そして、未来に向けて住持し興隆すべきものとして仏典に説かれる。ところが、さまざまな場で用いられる〈サンガ〉の語義や意味領域は多様でありあいまいでもある。本研究会では、釈尊のサンガを考察することを起点とし、仏教が東アジアへ伝来して以降、中国において議論が積み重ねられた三宝説を読解していく。これらの伝統的な三宝説の考察を通して、現代日本や真宗において仏法をいただくわれわれに現前するサンガとは何かという問題に迫りたい。

■はじめに

仏法僧の三宝への帰依は、仏教徒であることを証明するものである。しかし、このなかの僧宝〈サンガ〉とは何かということになると、その定義が共有されているわけではないように見受けられる。もちろん信仰・生活・実践の在り方は多様であり、それらにに応じてさまざまなサンガが想定されることがあっても良い。しかし、その場合でも〈サンガ〉とは何かという問題提起は不可欠である。もちろん仏や法の定義も、特に大乘仏教成立以降は多岐にわたるため、検証が必要であろう。しかし、サンガの場合は、思想や教義や立場を超えた議論が求められる。誤解を恐れずに言えば、三宝のなかで仏教者にとって最も現実的・具体的に存在するものがサンガだからである。そのサンガを考察していくに当たっては、さまざまな論点が考えられる。本研究会では、インドにおける釈尊のサンガと、そのサンガを東アジアの漢字文化



研究会の様子

圏の仏教者が、どのような共同体としてイメージしていたのかという問題の解明に迫りたい。特に中国仏教の諸文献を用いた後者の考察に力点を置くことが本研究会の特色である。

■釈尊のサンガ

多くの経典の冒頭にしばしば見られる「大比丘^{びく}衆千二百五十人」は、釈尊の教団を考えていくときに重要な意味をもっている。それは、初転法輪以降、多くの人々が出家して釈尊のもとへ集まり、三迦葉^{かしょう}（優楼頻螺迦葉^{うるびんら}・伽耶迦葉^{がや}・那提迦葉^{なだい}）や舍利弗^{しゃりほつ}・目連が弟子を率いて出家したことによって形成された釈尊教団の人員を示す象徴的な数だからである。その形成の過程を記録しているのが律蔵であり、この「大比丘衆」が成立して以降、さまざまな教団規定が釈尊によって制定されていったというのが律蔵の説く釈尊教団の実態である。

本研究会では、サンガ論の起点として、膨大な律蔵文献のなかから釈尊当時の三宝帰依や教団論についての確認を行う。これによって釈尊の教団がいかなる性格を有する共同体であったのかを検討していくことを課題としたい。具体的には、受戒制度の変遷とともに教団が形成されていく過程の考察がまず挙げられる。続いて律に説かれる種々の規定のなかから、「和合衆」とも呼ばれたサンガの特色を考察する。これらの考察は文献の読解が基礎的作業となるが、同時に研究会での幅広い議論によって、仏教の「共同体」論として考

察し、サンガの実態解明に近づきたい。

■中国仏教における三宝説

三宝・サンガ論は、東アジアの漢字文化圏においても仏教徒の大きな課題となった。特に多くの仏典を続々と受容した中国においては、諸仏典に多様な説があるため、三宝の定義・成立の次第・本末関係などについて、種々の議論が生じた。それらは、たとえば浄影寺慧遠（523-592）の『大乘義章』「三帰義」をはじめ、道宣（596-667）・智儼（602-668）・基（632-682）・法蔵（643-712）の著作中に見られる。以上の隋唐代の諸師は、三宝を三種類ないし数種類に分類してその特徴を論じており、たとえば慧遠の『大乘義章』は別相三宝・一体三宝・住持三宝という三つに分類する。

また、「僧」という語義の問題に端を発し、中国の仏教者が律蔵に規定される仏教の共同体をど

のようにイメージしていたのかも実はよくわかっていない。しかし、中国では、南北朝から隋唐へ至る過程で、『四分律』を中心とした律学が形成され、『四分律行事鈔』のような後代に影響を与えた著作も成立した。幸いこれらの諸文献の研究から、教団論の考察が可能である。先に挙げた道宣のような律僧や仏教史家のなかからは、僧から仏・法が興隆していくとした三宝論が主張されるようにもなっていく。その場合の僧〈サンガ〉とは何を意味するのかという問題を解明したい。

本研究会では、以上の研究を経たうえで、現代日本の仏教徒に現前する〈サンガ〉、あるいは受戒・持戒の実践を立場としない真宗における〈サンガ〉をどのように考えていくかという点に思索を深めていくことを目指す。

「『尊号真像銘文』試訳」を終えて

本研究会が基本とした方針は、大きく二つである。一つは、一々の言葉を機械的に逐語訳せず、全体の流れのなかでそのつど再考すること。もう一つは、全体での議論・検討・決定に対し、表現の統一のため、文章の具体的案出は担当研究員の責任とすることである。複数の意見をたった一つの訳文にまで仕上げるのは難しい。にもかかわらず、研究員一人ひとりの声がなければ、この訳は決して成り立たなかった。

あらためて見返してみると、親鸞が選ぶ言葉はシンプルである。反面、その言葉と格闘を繰り返したこの現代語は、ゴツゴツとした、とても不器用なものだ。だとすればそれは、この表現が現代語として、なおその途上にあることを意味しよう。目の前の現実^{じげん}に直接語りかけるような、自分にとって最も具体的な言葉が生まれ

ていくのは、ここからである。

この在り方には、念仏に対する親鸞の姿そのものが映されてはいないか。そもそも、一言、「南無阿弥陀仏」と口にされるところに一切は尽きている。しかし親鸞において、その一言は自身の迷いの現実^{じげん}に相即して、そのつどの言葉として語り直される。自らの現実^{じげん}に応じる言葉となって、念仏は繰り返し一つの根源を指し示す。

2011年6月から2014年6月まで、足かけ3年、計48回に及んだ本研究会だが、報告を終えるのにさらに3年を要した。それでも「現代語化」は終わらない。そのつどの現実^{じげん}は、そのつどの言葉を求めている。時をかえ場所をかえ人をかえ、「立ち上がれ！」との言葉を聞くところに、新たな言葉が重ねられていくのだ。

元親鸞仏教センター研究員 内記 洸

※本研究会での『尊号真像銘文』試訳は、「本巻」で一旦終了となります。

「今、浄土を問い直す」参加者募集中!

親鸞仏教センターでは、毎年「親鸞仏教センター研究員と読む—公開輪読会」を開催してきましたが、2017年度より

「親鸞仏教センター研究員と学ぶ—公開講座」と名称を変更し、今年度は、「今、浄土を問い直す」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と一緒に仏教の聖典をひもとく、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思ひます。初めてのお方もどうぞお気軽にご参加ください。

■「親鸞の浄土観

—『教行信証』の仏身仏土の巻を読む—(全4回)

趣旨文 近年、親鸞の往生観が頻繁に取り沙汰されている。しかしそれらの多くは、「浄土」とは何かという確かめを置き去りにして、議論がなされている印象を受ける。言うまでもなく、親鸞の言う往生とは「往生浄土」である。そうである以上、「浄土」の問題を抜きにして往生を語っても、一面的な議論にしかないの

ではないだろうか。よって本公開講座では、親鸞の主著である『教行信証』の「真仏土巻」と「化身土巻」を中心に、親鸞の浄土観について、あらためて考えてみたい。

期日：2017年11月30日(木)・12月7日(木)、
14日(木)、21日(木)
担当：青柳英司(あおやぎ えいし) 研究員



■「清沢満之と浄土をめぐる問い」(全4回)

趣旨文 清沢満之が晩年に行き着いた精神主義においては、宗教の要は「現在の安住」、「現在の救済」に定められている。未来(あるいは死後)については、われわれのおよび知るところではなく、それゆえ今ここに生きるわれわれの救済こそが重要である、というのが清沢の考えである。しかし彼はまた同時に、浄土の「客観性」や、「霊魂不滅」についても踏み込んだ考察を行っていた。これら

の議論は清沢にとっていかなる意味をもつことになるのか。清沢満之の複数のテクストを手がかりに、この問題を読み解いていきたい。

期日：2018年1月11日(木)、18日(木)、
25日(木)、2月1日(木)
担当：長谷川琢哉(はせがわ たくや) 研究員



■「永遠のいのちから広がる浄土

—『法華経』を読む—(全4回)

趣旨文 20年にわたって比叡山で修学していたと伝えられる親鸞は、『浄土和讃』のなかで「久遠実成阿彌陀仏」が釈迦牟尼仏として迦耶(がや)城に出現したと述べ、釈尊の本源に久遠のいのちをもつ阿彌陀仏の存在を見ている。この和讃の背景には、歴史上の釈尊に対する本仏を説き示す『法華経』の影響を想定することがで

きる。そこで大乘経典が課題とした浄土の世界を『法華経』如来寿量品を中心に読解し、五濁悪世の娑婆(しゃば)に実現する霊山(りょうぜん)浄土という世界をたずねてみたい。

期日：2018年2月8日(木)、15日(木)、
22日(木)、3月1日(木)
担当：戸次顕彰(とつぐ けんしょう) 研究員



■時 間：いずれも木曜日午後6時30分～8時30分

■資料代：500円

初回受付にてお支払いください。

※テキスト及び資料は当方で準備いたします。

■会 場：親鸞仏教センター 3階 仏間

■お申し込み：参加ご希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。定員35名。連続12回の講座ですが途中参加も歓迎です。

問い合わせ先

親鸞仏教センター 〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11
TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

リレーコラム

「近代教学の足跡を尋ねて」第13回 (上野精養軒)

上野精養軒は、上野恩賜公園のなかにある。そこは、曾我量深にとって、師清沢満之との忘れ得ぬ出会いの訪れた場所である。

1909年、清沢の7回忌法要の場で曾我は、清沢に「自己を弁護せざる人」という称号を贈り、師の徳を讃嘆している。そして、かつて清沢に対し反逆の意を抱き、筆を武器に迫害を企てていたことを、「嗚呼われは釈尊に対する提婆達多也、親鸞聖人に対する山伏弁円であった」と告白し、懺悔している。

その転換点はどこにあったのか? 時遡ること8年前、1901年の2月、上野精養軒における京浜仏徒の会にて。「精神主義」への囂々たる非難のなか、清沢先生は食卓演説へ立ち上がり、その席上、非難に対する一言の自己弁護をせず、ただ如来の前における懺悔の表白をのみ語られた、と。その清沢先生の尊いお姿を忘れることができない、と曾我量深は回想されている。

このエピソードに触れると、自然と涙が流れる。これは一体、なぜなのだろうか? (菊池)



行事日程のご案内

■親鸞思想の解明

日 時：2017年12月4日(月) 18時30分～20時30分
2017年1月9日(火) 18時30分～20時30分
会 場：東京国際フォーラム ガラス棟(G棟)

■ご命日のつどい

日 時：2017年12月8日(金) 10時～11時30分
2018年1月12日(金) 10時～11時30分
2018年2月9日(金) 10時～11時30分
会 場：親鸞仏教センター仏間

スタッフ紹介

嘱託研究員 なかむら りょうた
中村 玲太

1987年茨城県生まれ。明治大学農学部卒業。
東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻博士前期課程修了。
元親鸞仏教センター研究員。

嘱託研究員 きくち ひろのぶ
菊池 弘宣

1975年東京都生まれ。成蹊大学文学部英米文学科卒業。
大谷専修学院卒業。元大谷専修学院指導部。

主 事 こばやし まこと
小林 信